

「在日朝鮮人一世としての作家・立原正秋」(4)
－エッセイなどから読み解く民族意識－

総谷 智雄

Author TATIHARA Masaaki as the Korean resident in
Japan First Generation (4)
－ Understanding ethnic identity through essays －

KASETANI Tomooo

神戸医療未来大学紀要 第24巻 第1号
(令和5年12月)

<原著>

「在日朝鮮人一世としての作家・立原正秋」(4)
－エッセイなどから読み解く民族意識－

梶谷 智雄

Author TATIHARA Masaaki as the Korean resident
in Japan First Generation (4)

－ Understanding ethnic identity through essays －

KASETANI Tomoo

TATIHARA Masaaki has distanced himself from political activities, but has only once participated in a campaign to rescue Koreans living in Japan.

I believe this unusual action was not simply due to a sense of justice or chivalry, it was due to his ethnic identity as the Korean resident in Japan First Generation.

I would like to understand his ethnic identity from his essays and other sources.

Key words : ethnic identity, Korean resident in Japan First Generation,
political speech and action, progressive (progressive) cultural person,
brotherhood

民族意識 (エスニック・アイデンティティ)、在日朝鮮人一世、
政治的言動、進歩的文化人、兄者的意識

1. はじめに

前稿では、主に1960年代～70年代に執筆活動を行った作家である立原正秋（たちはらまさあき：1926-1980）が、民族名の金胤奎（キム ユンギュ）で執筆（1948年）・発表した小説「ある父子」と、彼と同年代を生きた日本人作家である小林勝（こばやし まさる：1927-1971）の作品を主たる資料として、在日朝鮮人一世¹⁾である立原正秋の民族意識について、考察を行った。

立原正秋の民族意識（エスニック・アイデンティティ）についての論考はきわめて少な

いが、彼の死の直前に、民族名「金胤奎」を本人から聞き出すことができ、評伝を書いた武田勝彦は、「私たちは正式な氏名を間に挿んでしばらくは沈黙したまま対座していた。当時韓国は大日本帝国に併合されていたから、国際法上、正秋は日本人であった。しかし、民族の血の流れから言うと韓国人であった。この苦しみこそ正秋が幾度となく主題とした混血の源泉である²⁾」と記している。しかし武田は「この苦しみ」について掘り下げた考察は行っておらず、「幾度となく主題とした」と武田が述べている「混血」という主題による作品については、筆者は寡聞にして、

「剣ヶ崎」以外の作品を認識していない³⁾。

また、高井有一による評伝（『立原正秋』、1991）が出版されてからは、いくつかの論考が発表されている。

任正焯は立原正秋について、「心の葛藤があったはず」⁴⁾としながら、「名を立原正秋として、日本の中世古典に沈潜し、着物を常用する姿からは、日本への同化の意識がはっきりと見て取れる」⁵⁾と、立原正秋の「日本への同化志向」を指摘しているが、「心の葛藤」についてはそれ以上の考察はなされていない。

四方田犬彦は、「和食から着物、能楽と、日本文化のもっとも洗練された精髓を体現した作家」⁶⁾と、立原正秋を表現しており、その「日本文化の探求」が、「もとより本物の日本文化のみならず、本物の朝鮮文化からも疎外されて育った知識人の心理的代償行為」⁷⁾であったと考察しており、立原正秋の朝鮮人としての文化的側面を完全に無視している。

尹健次は「立原が内面奥深く、生涯にわたって朝鮮を意識しつづけたことは間違いない。その点、立原文学の特徴は美意識の追求にあるといわれるが、それは日本人になりきろうとした立原にとってアイデンティティ追求のひとつの方法にはなりえても、その根底にはやはり民族にまつわる葛藤が疼いていた。（中略）立原が恋愛や愛欲の小説を書いた流行作家だったといっても、その根底にはやはり自らの出自をめぐるこだわりが渦巻いていた」⁸⁾と述べているが、この「間違いない」「葛藤が疼いていた」「こだわりが渦巻いていた」という主張の根拠になる出来事や立原正秋の発言などは、全く記されていない。

また、高月靖は、「彼は1946年に金井正秋の名で小説を二編、1948～49年に立原正秋の名で詩を二編、そして1949年に金胤奎の名で小説を一編発表していた。解放を経て半島に

南北両政府が成立したこの時期、立原はまだアイデンティティを定めかねていたのだろうか」⁹⁾と、立原正秋の民族意識への関心を示しているが、それ以上の考察は行っていない。

このように、先行論考においては詳細な考察が全くと言って良いほどなされていなかった立原正秋の民族意識について、筆者はさまざまな資料を用いて接近していきたい。これまでの論考に続いて本稿では、立原正秋が遺したエッセイなどから、さらに考察を深めていく。

2. 理論的背景

筆者は在日朝鮮人一世としての立原正秋の民族意識（エスニック・アイデンティティ）に強い関心を抱いているが、ここで、「エスニック」の名詞形であるエスニシティ（ethnicity）について、簡単に述べておこう。エスニシティに関する研究は膨大な蓄積を持ち、その論議も多様だ。しかし注目すべき点は、多くの論議が、ある限定された社会（空間）での社会的相互作用を重視している点である¹⁰⁾。

筆者はエスニシティ概念を、人種的特徴などの生得的要素に加えて、言語・習慣・宗教・他者など、非生得的要素との融合によって複合的に形成され特徴づけられ、さらに社会的相互作用によって変化・維持される特性や意識をあらわすものと理解した上で、立原正秋の民族意識（エスニック・アイデンティティ）に接近していきたい。

3. 接近方法

本稿では、立原正秋が執筆したエッセイなどをテキストとして、彼の民族意識、日本社会への意識について考察を進めていく。その

過程においては、その他の文献なども参考資料として活用する。

4. 『男性的人生論』

立原正秋は、強い独特の美意識・倫理観を持った作家として知られている。その美意識・倫理観は、彼が遺したさまざまな作品やエッセイなどから読み取ることができるが、ここではエッセイ集『男性的人生論』を主たるテキストとする。

『男性的人生論』は、月刊『諸君』（文藝春秋社）に1971年6月号から1972年1月号まで（8回）、月刊『潮』（潮出版社）に1972年3月号から7月号まで（5回）連載されたエッセイをまとめたもので、単行本は1972年11月に潮出版社より発行された。掲載誌の変更は、文藝春秋社が主催する芥川賞と直木賞の選考委員会のありかたを、立原正秋が批判したことが原因とみられる。

立原正秋は、「芥川賞と直木賞の選考委員のなかに、役に立たない廃馬がかなりいることである。この廃馬が（中略）これから書ける若い人たちを賞から落としている」¹¹⁾と、痛烈に批判している。

また彼は、在日朝鮮人作家である金石範（キム ソクポム）¹²⁾の小説「万徳幽霊奇譚」が芥川賞候補になりながら、多くの選考委員から低い評価を受けたことについて、次のように述べている。

「〈万徳幽霊奇譚〉は中編小説で、これは前々期の芥川賞候補になった作品である。そのとき私は、当然この作品が受賞するものとはばかり思っていたが、推したのは石川淳氏一人で、日本のことを書いていないからだめだ、といった迷言をはいた選考委員もいた」¹³⁾

1970年に発表された「万徳幽霊奇譚」は、幽霊になった「万徳」という朝鮮人男性を主

人公にしており、ユーモラスな筆致の中に、「済州島4.3事件」における民間人虐殺や、朝鮮を植民地支配していた日本における朝鮮人強制動員・強制労働などが描かれている。

立原正秋は続けて、「文学作品を前にして、その作者が朝鮮人だからという理由で、いろいろ理屈をならべて賞をあたえないのは卑劣である」¹⁴⁾と、日本文壇における差別意識を、強く批判している。

立原正秋と長く深い親交を結び、評伝『立原正秋』の著者でもある高井有一は、「朝鮮人に対する理不尽な差別意識から、文壇関係者も決して自由ではない。何かにつけて派手な彼の言動が話題になるとき、『何しろあの人はコーリアンだからねえ』と薄笑ひを泛べる人を、私は一度ならず見てゐるし、『おい立原、お前、朝鮮なんだつてなあ』と大勢の人がゐる中で、先輩の作家から面と向つて浴びせかけられ、顔色を変へて退席する彼を目標した編集者もゐる」¹⁵⁾と、日本文壇における朝鮮人への強い差別意識を指摘している。

立原正秋は、在日朝鮮人作家である金達寿（キム ダルス）¹⁶⁾の作品が芥川賞候補になったことに関して、「かつて金達寿氏が芥川賞候補になったとき、ある選考委員は、この人はすでに単行本が出ているからいまさら芥川賞でもあるまい、と言ったことがあった。ところがそのつぎの回の芥川賞には単行本が出ている作家に芥川賞があたえられた。これまで芥川賞を小さな殻に閉じ込めてしまったのは、こうした歴史認識の欠如した選考委員のちからに負うところが多かった」¹⁷⁾と述べている。この「歴史認識の欠如」という表現は、理不尽な「理由」によって朝鮮人作家を排除しようとする選考委員が抱く、朝鮮人への差別意識が、「歴史認識の欠如」にもとづくものであるという指摘であり、日本と朝鮮、日本と韓国の歴史に影響を受け続けてきた、在

日朝鮮人一世としての立原正秋の思いが込められていると筆者は考える。

5. 金嬉老事件に対する姿勢

立原正秋は、日本社会に対するこのような問題意識を抱きながらも政治的な言動については慎重な姿勢をうかがわせている。日本社会における朝鮮人への民族差別意識を広く認識させる契機となった「金嬉老事件」について、彼は次のように言及している。

「金嬉老事件のとき、私は、進歩的文化人から、彼を救う会に名前を貸してくれと言われていたがことわった。本人が獄中で私の〈美しい城〉と〈剣ヶ崎〉を読み、是非作者に会いたい、と言ったそうだが、やはり私はことわった。私は彼の心情を理解はしたが、結果を承認できなかった。朝鮮は南北にわかれているにせよ、独立した国である。重力に適應した体位をとるのが当然ではないか、というのが私の考えであった。それに、右であれ左であれ政治のにおいのする団体、会には顔を出さないのが私の信条である」¹⁸⁾

金嬉老事件とは、在日朝鮮人である金嬉老（キム ヒロ 本名：権嬉老【事件当時39歳】）が、金銭貸借問題から、1968年2月に、暴力団員2人を殺害後、人質を取って旅館に立て籠った事件だ。金嬉老は、籠城を続けながら、日本社会における在日朝鮮人への差別問題を訴え続け、逮捕されて裁判を受ける過程において、いわゆる「進歩的文化人」たちの支援を受けた。

『美しい城』は、「春の死」（『文學界』1967年7月号掲載）、「熱い日々」（『新潮』1967年8月号掲載）、「城」（『文學界』1968年1月号掲載）などをまとめた作品集で、「春の死」においては、関東大震災時に朝鮮人が「震災をよいことに略奪や放火をし、日本人から皆

殺しにされた」と、震災当時の「朝鮮人デマ」にもとづく民族差別発言をした教師が、朝鮮人の父を持つ生徒から刃物で報復される場面が描かれている¹⁹⁾。

「剣ヶ崎」は、『新潮』1965年4月号に掲載され、同年発行の短編集『剣ヶ崎』（新潮社）に収録された作品だ。同作品は、日朝混血（父は日朝混血、母は日本人）の兄弟（石見太郎・次郎）を主人公としており、太郎は「俺は日本人を憎み朝鮮人を憎み、日本人を愛し朝鮮人を愛してきた。俺のなかでは、圧迫者と被圧迫者の血が平行して流れ、いつまでたっても終わりのない葛藤を続けている」と語っている²⁰⁾。そして次郎は、「日本人にも溶けこめず、朝鮮人にも溶けこめず、絶えず宙ぶらりんの形で日々を生きて行かなければならなかったのです」²¹⁾と述べている。これは、「日本人でもなく、本国の朝鮮人とも異なる」という、在日朝鮮人の一面を活写しており、在日朝鮮人一世である立原正秋であればこそその表現だと筆者は解釈する。また次郎は、「島国根性というものがあり、それが私を受け入れてくれないわけです。私は、人からきかれれば、何分の一かは朝鮮の血が入っていると答えます。そうすると、相手の態度が目に見えない速度で変わって行き、よそよそしくなっていくのです。理屈では割り切れない日本人の血、不思議な民族の血がそうさせるわけです」²²⁾と、日本社会（日本人）の排他性・排外性を指摘している。

立原正秋が金嬉老の「心情を理解」しながらも、「救う会」への協力を拒んだのは、政治的言動への慎重さの他にも、「進歩的文化人」への反発も作用したのではないだろうか。立原正秋は、「もともと進歩的文化人と称する連中はこの愚劣な大衆の上ののっている人種である」²³⁾と、大衆と「進歩的文化人」への嫌悪感を示しており、1972年に明るみに出

た連合赤軍によるリンチ殺人事件について、次のように述べている。

「この集団を応援支援している進歩的文化人がかなりいるという。浅間山荘事件でもそんな文化人がいろいろと発言している。羽仁五郎氏などはこの文化人の頭目だろう。できたらこの進歩的文化人の意見をききたいものである」²⁴⁾

6. なぜ立原正秋は唯一の政治的活動を行ったのか

このように立原正秋は、「進歩的文化人」への強い嫌悪感を抱きながら、政治的活動からは距離を置き続けていた。『男性的人生論』において彼は、「現代の日本を動かしているのが政治家ではなく大企業であることぐらいは誰でも知っていることである。政治家はロボットにすぎないが、しかし、いつも手を汚すのは政治家である」²⁵⁾「萩からは明治の元勳が輩出しているが、歴史を縦に貫いてみると、あの元勳たちはいずれもそれほどの人物ではない」²⁶⁾などと、政治や政治家に対する強い問題意識を示しながらも、具体的な政治活動は行っていない。

そのような立原正秋が、「徐兄弟事件」²⁷⁾の被害者である、日本で生まれ育った徐勝(ソスン)【当時26歳】、徐俊植(ソジュンシク)兄弟【当時23歳】に対しては、これまでとは大きく異なる姿勢を見せている。

「韓国でスパイ活動を行ったうたがいで韓国当局につかまり、死刑の判決を受けた徐勝、徐俊植兄弟について、徐君兄弟を救う会、というのが、徐勝君が在学していた東京教育大学を中心にして生まれたのは、去年の秋だった。この会には政治的な色彩が感じられなかったもので、私は会に名前をつらねてもらった」²⁸⁾

立原正秋は、「徐君兄弟を救う会」に、次のような一文を寄せている。

「徐君兄弟がなにをしたのか私には判りませんが、もし兄弟が南北統一の手がかりをつかむためになにかを仕出かしたのであれば、この死刑判決は無慙にすぎます。若い生命がこのようにして断たれるのは、まことにしのびないことです。私はかつてこのような署名運動には一度も名をつらねた事がなく、まして資金の一部をになったこともありません。私はいわゆる進歩的文化人ではありません。花鳥風月を愛している一文士に過ぎません。わかい生命を思うと愛惜にたえません。寛大な処置を願ってやみません」²⁹⁾

彼は、この文に添えて、「きわめてすくない金を同封した」³⁰⁾と述べている。

政治的活動をすることが皆無だった立原正秋が、このように「徐君兄弟を救う会」に名を連ね、「愛惜にたえ」ない思いをつづり、カンパを行うまでに至ったことは、単なる正義感や義侠心によるものでは決してなかったであろうと、筆者は推測する。「この会には政治的な色彩が感じられなかったので、私は会に名前をつらねてもらった」と彼は述べているが、日本と国交のある韓国において逮捕・有罪判決を受けた在日朝鮮人を救済しようという運動への参加とカンパは、明白な政治的活動以外の何物でもない。

また、「南北統一の手がかりをつかむために」という表現を使う立原正秋の心情は、1969年に刊行された著書の巻末における自著年譜で、「昭和二十年、日本と朝鮮が滅亡することを切にねがう。八月、終戦」³¹⁾と述べている心情からは、相当の距離があるように感じられる。「朝鮮が滅亡すること」が、具体的に何を意味するのか、なぜこのような文を立原正秋が書いたのかについては、現段階で判断することは困難であるが、小説「ある

父子」に描かれた、彼が生まれ育った植民地支配下の朝鮮、日本に渡ってから回想する朝鮮など、さまざまな朝鮮の姿を考慮した上で、「滅亡することを切にねがう」という表現が生み出されたのであろう。

このように、かつては「朝鮮が滅亡することを切にねが」っていた立原正秋が、現在においても、また将来においても「帰国」する可能性が皆無と思われる状況下で、「祖国」の「南北統一」について、あえて言及するに至ったことは、朝鮮にルーツを持つ在日朝鮮人一世としての民族意識の深まりと強まりをうかがわせる。

立原正秋は、自分よりも9歳年下の在日朝鮮人作家である李恢成（イ フェソン）が「またふたびの道」を発表したとき（1969年【立原正秋43歳、李恢成34歳】）、是非会いたいと、彼を自宅に招いて、高価な松阪牛の焼肉でもてなしたという³²⁾。

「立原さんには兄者（あにじゃ）的意識があった」と、李恢成は高井有一に語っている³³⁾。儒教的価値観の強い朝鮮半島における人間関係では、家族以外の関係においても、「疑似兄弟姉妹」のような極めて親密な関係が形成されることが少なくない。たとえば韓国社会においては、後輩が先輩を「ヒョン（형）：お兄さん」や「ヌナ（누나）：お姉さん」と呼ぶことなどは、至極一般的である³⁴⁾。

高井有一は、「血を同じくする彼には、立原正秋の発言の裏側にある心情が、たやすく読み取れたのだらう。（中略）破格の好意の示しやうに、李恢成は身内を庇護する朝鮮人氣質を見出してゐる。（中略）立原正秋の生涯は、『〈在日〉のまぎれもない一つの生態であり、その厳肅さを持つ』といふのが李恢成の考へ方である。私などの前ではあからさまに口にしなかったが、〈朝鮮〉と〈朝鮮人〉は、立原正秋の念頭から離れなかったのだと思は

れる」³⁵⁾と、両者の関係と立原正秋の民族意識について述べている。

政治的活動から距離を置き続けてきた立原正秋による、徐兄弟に関するきわめて異例とも言える「政治的活動」は、前述したように、自分よりも相当に若年である同胞への「兄者の意識」にもとづくものではなかったのだろうか。そして、その意識は、若い同胞たちの先達である、在日朝鮮人一世としての立原正秋の強く深い民族意識に支えられたものであったと、筆者は考える。

7. おわりに

ここまで、立原正秋が執筆したエッセイなどをテキストとして、彼の民族意識に接近しようと試みた。

前々稿と前稿で述べた「通過儀礼」（「金胤奎」という民族名で、日本に渡る11歳までに体験・見聞きしてきた、植民地朝鮮の実情を記録すること）を経て、「日本人」として日本での生活を続けた立原正秋の人生について、「いかなる日本人よりも日本文化の精髓に知悉した日本人たらしとする姿勢」³⁶⁾など、「徹底した日本人指向」を指摘する評価がなされることがあるが、そのような評価がきわめて表層的なものであることが、今回の考察によって裏付けられるように思われる。

今回は、立原正秋の作品に登場するさまざまな料理や、彼がエッセイで紹介した調理法などから、在日朝鮮人一世としての立原正秋の文化的側面について、考察していきたい。

引用文献・註

- 1) 筆者は、日本で定住・永住することになった朝鮮半島（済州島なども含む）にルーツを持つ人たちを総称して「在日朝鮮人」

- と表記する。その中には、朝鮮籍、韓国籍、日本籍の人たちが含まれている。
- 2) 武田勝彦: 身閑ならんと欲すれど風熄まず、214、KSS 出版、東京、1998
 - 3) 本稿でも紹介する作品集『美しい城』には、朝鮮人の父親を持つ主人公が登場するが、この作品集における主題は、「感化院」における様々な少年たちの「生き方」である。「混血」は主人公が持つ重要な一つの要素であるが、主題では決していない。
 - 4) 任正嫻: 美をつきつめた立原正秋と柳宗悦、任著、朝鮮科学文化史へのアプローチ、236-239、明石書店、東京、1995
 - 5) 同上書、237
 - 6) 四方田犬彦: 立原正秋という問題、四方田著、日本のマラーノ文学、59-91、人文書院、東京、2007
 - 7) 同上書、72
 - 8) 尹健次: 在日朝鮮人の文学—植民地時代と解放後、民族をめぐる葛藤、人文学研究所報、Vol.52、117-144、2014
 - 9) 高月靖: 立原正秋 年譜に刻み込んだ創作、高月著、在日異人伝、74-87、バジリコ株式会社、東京、2018
 - 10) たとえば、竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ-強制収容と補償運動による変遷』東京大学出版会、1994など。
 - 11) 立原正秋: 男性的人生論、122、潮出版社、東京、1972
 - 12) 金石範 (1925~) は、現在の大阪市生野区で生まれ、「済州島4.3事件」(日本からの植民地支配終了後、米国とソ連【当時】によって、南北に分かれて信託統治された朝鮮の南側において、米国の後押しによって新国家樹立の動きが起こり、ソ連がこれに反発したことから、南だけの単独選挙となった。単独選挙に反対する済州島の住民たちは、1948年4月3日に武装蜂起し、それを鎮圧する過程で3万人近い島民が犠牲となった)の追求をライフワークとして、この事件を描いた超大作『火山島』を執筆している。
 - 13) 立原正秋: 前掲書、159
 - 14) 同上書、159
 - 15) 高井有一: 立原正秋、49、新潮社、東京、1991
 - 16) 金達寿 (1919~1997) は、日本の植民地支配下にあった朝鮮で生まれ、10歳で渡日し、様々な職業を経た後、小説・評論などによって作家として高い評価を受けるようになる。また、古代史研究者としても多くの業績を残している。
 - 17) 立原正秋: 前掲書、143
 - 18) 同上書、160-161
 - 19) 立原正秋: 美しい城、22-24、新潮社(新潮文庫)、東京、1981〔1974〕
 - 20) 立原正秋: 剣ヶ崎・白い罌粟、92、新潮社(新潮文庫)、東京、1971
 - 21) 同上書、125-126
 - 22) 同上書、141
 - 23) 立原正秋: 男性的人生論、154
 - 24) 同上書、169
 - 25) 同上書、19
 - 26) 同上書、186
 - 27) 徐勝 (1945~)、徐俊植 (1948~) の兄弟は、韓国留学中の1971年、スパイ容疑によって逮捕され、有罪判決(徐勝は1審では死刑、2審では無期懲役、徐俊植は1審では懲役15年、2審では懲役7年)を受け、刑が確定した。その後、徐俊植は1988年に、徐勝は1990年に釈放され、再審では両名の無罪が確定した。
 - 28) 立原正秋: 前掲書、161
 - 29) 同上書、161
 - 30) 同上書、162
 - 31) 立原正秋: 剣と花 鎌倉夫人【現代長編文

学全集49】、403、講談社、東京、1969

32) 高井有一、前掲書、189

33) 同上書、189

34) 全くの余談であるが、筆者（当時29歳）が1992年に韓国高麗大学大学院に入学して、自分よりも年少の同級生たちから、「トモオヒョン（智雄兄さん）」と呼ばれたときに、筆者は深く感動した。

35) 同上書、189-190

36) 四方田犬彦：前掲書、87